

第13回「日本語大賞」

テーマ「 」に伝えたい言葉

一般の部 優秀賞 受賞作品

おつかれ様でした

愛知県
石川 楓

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

おつかれ様でした

石川 楓（いしかわ・かえで）

地震雷火事親父。もうとうに死語だろうか。しかし、父は、怖かった。

所謂、団塊の世代の父は、戦後高度経済成長期を生きた仕事人であり、絵に描いたような亭主閑白であった。必ず、一番風呂でなければならぬし、一汁五菜でなければならぬし、テレビのチャンネル決定権は絶対だった。父に関する暗黙のルールは山ほどあり、これらのルールは破られたが最後、家中に怒号が鳴り響くのだ。

ガチャ。十八時四十五分、決まってこの時間に玄関の扉が開く。

「お父さんだ。」

少女の背筋は、ピンと伸びる。父は帰宅後すぐ風呂と食事を済ませると、ソファを陣取り、ビール片手にナイターを観るのが常。酔いが回り始めるのは、大体小一時間後。ドンと、大きな足がソファの横から飛び出すのがサインだ。

「アニメが観られる。」

私は息を潜め、父が完全に眠り込むのをじっと待つ。寝息が軒に変わったら、忍び足でソファに近づき、リモコンをそおとと持ち上げる。念のため、恐る恐る父の顔を覗いてみた。

「赤鬼。」

眉間の深い溝、歯を食いしばったような、への字口。父は寝ていても、やっぱり、怖かった。

あれは、私が小学三年生の頃だったろうか。日曜日の午後、クラスメイトのKちゃんの家で遊ぶことになった。玄関をくぐり、私は固まった。

「お父さん、いるの。」

「日曜だもん。」

あっけらかんと答えるKちゃん。

「私、中に入ってもいいの。」

挙動不審な私を、Kちゃんは怪訝な顔で見ている。私は、緊張しながらもKちゃんと一緒

にリビングでおやつを食べていた。すると、Kちゃんは徐おもむろに立ち上がり、忍び足でお父さ

んの背後に回ったかと思うと、

「わっ。」

肩を叩いて驚かせた。

「怒鳴られる。」

私はぎゅっと目をつぶり、罵声が飛んでくる準備をした。しかし、聞こえてきたのは、笑い声だった。

「Kちゃんのお父さん、全然、怒らないね。」

私を感じしていると、Kちゃんは宇宙人を見るような顔をした。この日、私は初めて知った。自分の父は、ちよつと違うのだと。そして、

「Kちゃん、いいなあ。」

と、思わず呟いた。しかし、Kちゃんは私を羨ましがっていた。私は、Kちゃんが欲しい物をすべて持っていたからだ。父は、私に何でも買い与えていた。

ある日突然、スポーツ用品店に連れていかれたことがある。

「欲しい物、こうてやる。」

父はそう言うが、運動嫌いの私は欲しい物がなくて困っていた。しかし、何もいらねえとは言える由もなく、無理やり使いたくないテニスラケットを手を取った。その傍ら、父は野球のグローブをじっと見つめていた。

「ええなあ。新品のグローブ。」

ぼつりと呟いた父の横顔は何とも悲しそうで、それは初めて見る父の顔だった。私は想像した。少年の父は、グローブを買ってもらえなかったのだろうか。今の父は、私と野球がしたいのだろうか。いずれにせよ、私は何故か申し訳ない気持ちになり、男に生まれれば良かったと思った。あの時のテニスラケットは、今どこにあるのだろうか。物置にしまい込んだきり、一度たりとも見ていない。

ぐんぐん、ぐんぐん、背が伸びた。父に追いつきそうなくらい背が伸びた。額には幾つかのニキビ、足元には光るローファー、真新しい紺色のブレザーに身を包んだ私は、高校生になっていった。この頃、父と話した記憶はほとんどない。私にも人並みに反抗期が訪れた時、学校で作文の宿題が出された。テーマは「親」だった。私は勿論、母について書くつもりだったが、母は父について語り始めた。

「お父さんの両親は、お父さんが生まれてすぐに亡くなって、おばあちゃんがお父さんを育てたんですよ。戦後やし、お金もないし、大変やったんやろうねえ。厳しい人やったみたい。お父さんが小学生の頃は、成績が悪いと、雨でも外に放り出したし、箸の持ち方一つでバチンと叩いたんやって。でも、お父さん、こんなふうに言っとった。

『ばあには、よう叩かれた。腹立った。せやけど、親のいない子、これ言われるんだけは嫌やった。』

私は、父の過去に聴き入っていた。そして、もっと父を知りたい、知らなければと思った。中学を卒業した父には、無論、就職の道が待っていた。しかし、どうしても高校を諦めきれなかったらしい。

「夜間の定時制高校に通わせてくれんか。学費は自分でなんとかするから。」

父は、祖母に頼み込んだ。

「そんな甘いもんちゃう。」

祖母は、頑として首を縦には振らなかったが、来る日も来る日も頭を下げる父に、やがて根負けしたらしい。働きながら学ぶ生活は過酷だったに違いない。それでも、三年間辛抱し、父は晴れて高校の卒業証書を手にした。しかし、喜びも束の間、出世していくのは大卒の同僚であった。これでは、貧乏から抜け出せない。あとは、持ち前の負けん気だけだった。父は人一倍努力し、誰よりも気を遣い、着実に成果を出し、自分の地位を築き上げていった。学もないのにと、やっかまれたこともあったようだ。悔しい思いをしただろう。辞めたいと思ったこともあっただろう。しかし、父は定年まで勤め上げた。まだ齢十六の毬栗頭が真っ白に変わる六十まで、四十四年間、働き続けたのだ。お父さん、私も、高校を卒業して、大学を卒業して、働くようになって、やっとなんか分かったんだよ。お父さんの凄さが。

現在、私は小学生の息子を連れて、度々、実家に顔を出す。皆で夕食をすませると、息子は、父に買ってもらったゲームに夢中だ。父は、相変わらずビール片手にソファで眠り込んでしまった。子供の頃、あんなに大きかった父の足は、今では、小さく見える。寝冷えし

ないよう布団をかけに行くと、そこには、赤ちゃんのように安らかな寝顔があった。ああ、ようやく肩の荷が下りたんだね。あの頃、鬼の形相で家族を守っていたんだね。私は、愛されていたんだね。

「おつかれ様でした。」

私は、思わず呟いた。